史觀殊に唯物史觀の批判と科學的史觀の提唱

牧　健

二

近時我國に於ても、史觀といふものが學界の注意を引き、殊に唯物史觀を歷史研究の根本見地となせよといふ見解がある。史觀反省の此の傾向は史學の發達の爲に喜ぶべきことである。然るに唯物史觀を取ると否とに依りて、歷史研究の着眼點や問題の取扱方は、勿論一大變化を生ず可きものであるが、果してこれを取る可きものか、否か。固よりかやうな自覺された史觀なくとも歷史が書ける。又我史學界は之に關して一般に沈默的であるけれ共、歷史家としては是非共一應考へて見る可き事だ。否、歷史家こそは歷史觀を正當に論ずることを得べき第一有資格者だと言はねばならぬ。それ故予はこゝに少しく之に關する所見を述べて見るが、何分問題が大きいし、予は史觀の諸學說に關して知見の淺い者であるから、此處に述ぶる所も尙ほ意に滿たぬものがないではない。が、卒直に卑見を述べて批判を仰ぎ、更に今後の討究を進め度い。

史觀の問題は從來は殆ど全く哲學者達の問題としてのみ考へられて來たのであるが、既にそれが歷史に對する見解である以上は、歷史家こそは之に對して最大の關心を有すべき筈のものだ。史觀が甚

だしく歴史研究を離れて、主として直觀的に、思辨的に、又は論理的に考察せらる可きものでないのは勿論である。然るに從來史觀をもつて殆んど全く哲學者又は一部科學者のみの問題として、歴史家は之れを傍觀し、爲さるゝがまゝに放任して居つたといふ事が、抑史觀に關する從來の研究の不完全さの最大の原因をなし、歴史學並に社會科學の一大欠陥をなしてゐる。此事は史觀研究の冒頭に當り切言を要することなのである。普通に歴史家は、過去の事實の研究に沒頭し、殊に考證的な方面に多くの興味を有し、その眼界が甚だ局限せられてゐるから、歴史全體の本質といひ、歴史成立の原力といふが如き大問題は、殆ど之を考へて見ない。又之を考へても、到底深いものにはなり得ない樣な傾向を示して居る。そこで、斯くの如き大問題になると、古來之を哲學者等に委ねて、歴史家は哲學者等の見解に依つて指導せらるゝといふ樣な事になつて居る。直接哲學者等の史觀に盲從しない迄も、間接的に或る哲學者等に依つて最も徹底的に主張せられて居る思想に動かされて、歴史を見るといふのが通例である。併し乍らよく考へて見れば、歴史を實際研究して居る者が、歴史の究極の觀方に就いて、歴史家以外の哲學者や科學者の指導を受けて平然としてゐるといふが如き事は、其事自體が一の奇觀でなくてなんであらう。そこに一つ史觀研究の出發點に於て、大に反省す可きところがあると思ふ。

その反省といふのは外でもない。史觀は次の二つの點に於て反省されねばならぬ。一つの反省すべ

き點は史觀にある。卽ち歷史事實の研究に基く史觀の批判といふ事である。歷史家は歷史事實に就ては、大なり小なり、ともかく忠實に研究して居るのであるから、其の研究の素朴な態度と歷史研究の結果とを顧みることに依つて、史觀を批判するといふ事は、之は必ずや行はる可き事である。蓋し直觀や思辨や推理は假令其れ自體の仕方に於ては間然する所がなくても、歷史を理解するが爲の觀方としては、歷史家の素朴な研究態度に照してみて、容すことの出來ぬ場合もありうるのである。又、史觀で說かんとする所は、歷史研究の結果によつて實證さるゝこともあるが、否認されねばならぬこともありうるから、此等の點が反省されねばならぬ。他の反省すべき點は歷史家にある。卽ち史觀は歷史家が批判し得るにも拘らず、歷史研究上輕視し難き價値を有する事を認めざるを得ない。歷史家は其の點を一つ大に反省せねばならぬ。之には先づ直觀的、抽象的又は理論的な思惟の飛躍と言ふ者の價値を思ふべきである。歷史家は兎角、史實の有無の判斷に長所を有するも、惜むらくは思惟に拙劣だ。そしてまさしく此くの如き欠陷を有する事が、歷史家は折角貴重な人生血涙の跡と民族興亡の途とを辿りつゝ思想的には偉大なものを產出し得ずして、單純なる事實家たるに終ると言ふ憐れむべき結果を生むのである。此の點は歷史家の特に反省す可き所である。事實を如何に多く知つたからとて史觀の反省が結晶して光輝を放つに至ることはない。形を整へた史觀を得るが爲めには、是非とも、思惟の飛躍を敢行しなければならぬ。考證を重んずる事實第一主義の歷史家は、所謂史觀なる者に於

て見るところの飛躍的な考へ方に對して、何となく安心しない樣な氣持になるのであるが、其の氣持を起す大なる原因としては史觀そのものゝ眞實性を疑ふのにもよるが、一つは右に言ふ事實尊重の、否偏重の歷史家的性癖と、之に伴ふ思惟の不熟練といふことに基くのである。それ故此の點を反省して、歷史家が現に採つてゐる所の研究態度を、理論的に充分推し進めて見る時には、其の結果が如何になるものであるか、といふ此の點を考へない限りは、輕々しく或種の史觀を排斥したり、又は採用したりする事が許されない。然るに今日我國に於て行はれてゐる史觀に關する論議を見ると、以上二つの反省の何れに於ても、甚だ缺くる所のあることを認めざるを得ない。或者は世に謂ふ所の史觀に盲從せんとし、他は之に就て一考を與へるだも惜む。史觀に關する論爭が兎角水掛論に終り易いのは、全く右の二種の反省を欠いでゐるが爲めである。

抑史觀又は歷史觀といふ概念自體が、そんなに明確なものではない。特に稱して史觀と名づけらるるものは餘程程度の高いものであるが、若し廣く史觀といふ時には、史風の問題と相反映せしめて考ふ可きものである。我等が史風を云ふ時には、必ずや其の史風に固有な歷史の觀方を想定するものである。歷史家が統一的に歷史現象を把握せんとする以上は、必ずや何か之を把握するが爲の主觀的な立場を有する筈のもので、其の立場の相違によつて史風の差別を生ずる。假令、飽く迄客觀的な立場を採つて忠實に有りの儘の事實を研究すると云つて居る場合にも、其の歷史家は必ずや或る觀方に從

ふて歷史を觀て居る者である。卽ち彼の生息して居る時代の思潮に乘じ、彼の敎養と生活とに支配せられて居る爲め、自ら彼獨特の觀方を爲さゞるを得ないのである。こゝに彼獨特の史風がある。其の史風の存する所に廣く之を言へば史觀があると云ひ得る。假令それは歷史の究極の根底は之れだと云ふが如くに、つきつめたものを主張せないにしても、無意識的にでも或種の歷史觀を抱いて歷史を觀ると云ふ其の態度の存在は、如何にも之を否認し難い。例へば今日我國で流行的な唯物史觀に就て見ても、此の史觀に依る可しと主張する者は、勿論極めて鮮かに此の史觀を有するのであるが、然らば之を排斥する者は如何にと云ふに、之を排斥する所に夫れ相當の史觀の存在を豫定せざるを得ない。然らば之に贊同もせず反對もせざる者は如何といふに、恰も彼は史觀を有せざるが如くであるが、然らば全く之を有しないのであるかといへば、實はそうではない。彼と雖も史觀を持つて居る。例へば時代の或種の進行を觀て、「蓋し自然の成行なり」と云つたりする歷史家の常套語は、歷史の發達に何か必然的なものを想ふて居るから斯くの如く云ふのである。其の必然的なものに對して何が必然的なものかといふ事は、彼に於ては判然としないのであるけれ共、兎も角無意識的に歷史の必然的な過程を豫定して歷史を觀て居る。そこに彼の歷史觀がある。尤も普通にはかゝる低度のものを史觀とは言はぬが、彼が若し此の自然的な歷史の過程といふ事をよく反省して見たならば、高度の歷史觀に到達す可き素地は、既に早くより素朴なる彼の歷史研究法の中に伏在してゐたことを自認せざるを得ない

のである。たゞ次の樣な事が之を妨げて居る。歷史現象が極めて複雜であつて、どこが中心點なのか、何が根底なのか、容易に之を明らかにし難い上に、前に云つた歷史家に通有的な思惟の不熟練の爲めに、考察を深く進める事が出來ない事になつて居る。

右の如く考へるならば、史風といひ、史觀といふものは、實は歷史家各個人に自ら定まつたものがある。それがなくては、歷史を書く事もどうする事も出來ぬ。そして歷史の研究や叙述の優劣は、史風と史觀との優劣にかゝつてゐる所が多いと云ひ得るのである。之は個人の場合であるが、廣く或種の歷史家は或種の史風を有し、或特定の時代は其の時代に流行した史風があつたと云ふ樣に、史觀に於ても、或種の史觀を奉ずる一團の學者と、他の史觀を奉ずる一群の學者とが對立したり、又は或る時代を風靡する一定の史觀の發生を見るのである。

併し乍ら、廣く現代の歷史家が、共通に是認して居る歷史學的方法といふが如きものは、こゝに史觀として論せらる可き問題とはならない。例へば、現代の史學では、歷史事象の發達を研究するといふ事は歷史家たる以上は當然爲す可きことなのである。又歷史學的な觀方は、自然科學と異なつて、個性的な觀方であるといふ事も、一般に是認せられて居る事である。斯の如き事でも、實は學問的考察が發達した結果、今日一般的に是認せられて居るのであるけれ共、これは歷史そのものゝ成立と發達の本質を如何なるものと觀るかといふ、歷史其者の理解に關係のない事であるから、これは史觀の

問題ではない。實に斯樣な一般的性質を有する歷史學に於て、研究の對象となれる歷史事實を究極する所如何なる本質を有したものであると觀るか、言ひかへれば、歷史が如何なる原動力によつて動かされ、次に如何にして成立し、成立せる歷史は如何なる意味を有する者であると觀るか。其の事が史觀の問題である。殊に全歷史の成立の原動力が今日の史觀の問題として爭はれてゐる所である。

そしてかの漠然として把捉し難い樣な、普通の歷史家に見る落付のない、否よく自覺されてゐない生な狀態の史觀の如きも、之を推し進めて行くとどうなるかといふが如き事は、史觀の研究に於ては實は最も興味ある問題なのである。世の史觀を論ずる者は、ヘーゲルの自由意思の發展を說く見解とか、マルクスの經濟的生產力を根底とする觀方とか、其他進化論的な史觀や、宗敎的な史觀や、心理學的史觀などといふが如き、定まつた形式を採れる高度に發展した史觀に就て論ずるのが普通であるけれ共、斯の如きは歷史研究に益する所の、豫期せらるゝ程然く大なる者ではない。我等はいまだよく自覺されて居ない素朴なる歷史家の有する生な歷史觀といふものを却つて多く問題とす可きである。斯の如きものは、勿論史觀と云ふに値しない程低級なものであるが、併し乍ら史觀の問題をそこ迄掘り下げて來ない以上は、史觀が廣く客觀的眞實性を獲得し得る程の者となつて來ないのである。何となれば史觀が廣く一般の歷史家の考へ方をも反省しない以上は、實は歷史の本質を捉へる所の其の機微なる呼吸と言ふものには觸れて來ないからである。史觀は少數の歷史家や又はあまり歷史を知ら

ない哲學者や科學者達の高級な思惟の問題に止つてゐてはならない。廣く總ての歴史家を動員して其の反省を促す可きものなのである。

今日史觀を論ずるに就いては、實は最早試驗濟となつて居る宗教的史觀や、進化論的史觀や、倫理的史觀や、自由意思の發展を說くヘーゲル流の史觀等を、くど〳〵しく論ずる事を要しない。現代の日本人が最も多く關心を有する問題は、歴史の全面的基礎を經濟力に在ると主張する唯物史觀なるものである。今日我國に於ては、此の史觀が廣く社會科學の上に深酷に影響を與へて、之に依るものを新興の社會科學であると云ひ、新興經濟學とか、新興歴史學とか、新興法律學新興教育學を說くはもとより、新興文學だとか、新興藝術だとか云ふが如きもの迄が、唯物史觀と大なり小なりの關係を持つたものになつて居る。此の唯物史觀は歐米の學界では今日我國に於ける程尊重せられず、史觀としても之を批判したものが追々現はれて居るが、併し現代の史觀としては、唯物史觀が未だ決してよく克服せられたるものではなく、社會科學の學徒は是非とも一度は之を反省せなければならぬものとなつて居る。尤も之を主張する論者が常に必ずしも學問的良心から之を主張するとはかぎらない。或は流行に從ひ、或は其の當否は別として普通には之を以てプロレタリア階級の階級的史觀であると云ふが如くに見て、實用的の立場から卽ち社會主義運動に於ける理論鬪爭の武器として之を奉ずる者も少くはないのであるが、併し唯物史觀が今日見るが如き盛大を致した所以のものは、其の內に相當の眞

理性を含んで居るからであつて、眞理性あればこそ人心を吸引し、人心を吸引すればこそ社會主義運動の武器として之を使用する事が出來るのである。

史觀の有する吸引力といふものが、今日我國の青年學生に於て現に見るが如く強く働きかけて居るといふ事は、實に史觀なるものゝ優越せる價値を現實に見せつけて居るものである。歴史家は古來何千年の歴史の事實に通じてゐても、現代生活に對して、殆ど何等力のある事が云へないのに對して、唯物史觀の現代生活に於ける偉大なる貢献を見よ。其の史觀の前には多數の學者を煩悶せしめ、無數の青年を心醉せしめ、現代資本主義國家の政治家をして、深く此の史觀の恐る可き事を思はしめて居るではないか。實に史觀こそは、事實（ザイン）と規範（ゾルレン）との橋渡しの役を勤めるもので、古來史觀と名の付くが如きものは、一度は其の時代を風靡したものだ。之を離れて歴史や、法律や、經濟や、政治や、宗教や、教育や乃至藝術の如きものをも、考へる事は不可能であつたのであるが、現に目前に唯物史觀の偉大なる感化力を見る以上は、史觀の問題が如何に重大な問題であつて、現代に於ては唯物史觀の問題が眞に反省さる可き大問題である事を深く深く沈思せしめずんば止まないのである。

歴史學以外の社會科學に於ける史觀の問題に就て說くが如きは、もとよりこゝに問題ではない。今歴史家の立場から唯物史觀を見るとどうなるかといふに、今日の歴史家が大なり小なり此の史觀の影響感化を受けて居る事は明白な事實だと云へやう。蓋し經濟的生產力が社會生活に於て有する力を、

偉大なものとして現代人が注意せざるをえないのは、現代の資本主義經濟の發展の當然の結果であると共に、又近代に於ける科學的な思考方法の普及の結果であつて、宗教と權威とから遠ざかつた現代人にとつては、經濟生活が全くむき出しの姿に於て、其の眼に映ずる事となつて來た。唯物史觀といふが如きものに從はないでも現代人である以上は、人間生活に於ける經濟の力を到底輕視する事は出來ない。之を輕視する樣な事では、問題の捉へ方と其の取扱方とが、到底現代人の要求に適應したものとはならぬ。それ故に現代に於ける歷史研究も亦其の共通的な色彩として、歷史に於ける經濟生活の方面を重んじ、經濟に何等の關係のない樣に見ゆる方面の文化現象と雖も、何とかして其の經濟的根據を見出さうと努める。此の時に當り唯物史觀の如くに經濟的に徹底した見解を示した史觀が、歷史研究に大いなる影響と感化とを與へて居るのは當然の事だ。

然るに歷史研究に於て現に見る所の事實は、右の如き經濟尊重の事實あるに拘らず、歷史家は一般的には、唯物史觀其者に對して常に懷疑的だといふ事である。經濟事象を重く觀て居るに拘らず、豫め唯物史觀といふ特定の史觀に從ふて歷史を研究するといふ事はしない。否却つて素朴を愛する歷史家の多くからは、さういふ史觀に從ふ事を以て、獨斷的であると云ふ聲をすら聞く。歷史の客觀的研究が之に依つて害はれると考へられる。尤も客觀的といふても、前にも云つた如く、主觀を離れて歷史を觀るものでもなく、從つて又結局は全然史觀を有しないものでもないのであるが、唯物史觀とい

ふが如き高度の史觀となると觀方が一方に偏して、其の結果歴史事實の捉へ方が歪められたものになると考へられ易い。これは果して素樸史家が學問的に時代遲れだからであらうか。或は今日の情勢がプロレタア時代になつてゐないが爲であらうか。兎も角唯物史觀に對する批判の第一問題は、素朴な一般歴史家に依つて此の史觀が懷疑を以て迎へられ易いと言ふ點に就て起らざるを得ない。

尤も歴史家の中には、唯物史觀に依るとは明言せず、否寧ろ、若し問はれたならば、そんなものに從ふて居ないと云ふであらうところの學者にして、實は常に經濟現象を以て歴史現象の根底に置き、經濟生活の推移につれて、歴史が卽ち各種の文化現象が推移したと云ふ根本的見解を採つて居る者は今日に於て決して少しとせないやうである。そして又、唯物史觀に於て術語として用ひて居る生産力生産關係、階級鬪爭、下層建築、上層建築、等々の用語を、此の史觀で使用して居る樣な仕方に於て使用して居る歴史家も決して之なしとせないのである。然も彼は、此の史觀に據つて居るのかと問はれると、否と答へ易いのであるが、此處に到ると此の歴史家の態度に對して、甚だ疑問を抱かざるを得なくなるものがある。彼は歴史の根底をひとへに經濟的にのみ理解する態度を採りつゝ、何故唯物史觀に依ると云はないのであるか。殊に何故に輕々しく唯物史觀の術語を唯物史觀の如くに使用しつゝ此の史觀に依つてゐないと云ふのであるか。之は甚だ疑問とす可き所であるが、此處に到ると、確かに歴史家が史觀に就いて反省的でないといふ欠陷を暴露して居る事を認めざるを得ない。彼は現代の

思想を呼吸するので、研究の對象も、其の取扱方も、經濟的方面に傾くのであるが、史觀といふものをよく反省してゐないから、其の點を問題にされると、自己の研究態度に明かに矛盾した事を、平然として答へて憚らないことがある。今一つの點は前にも言ふた樣に、歷史家は普通には論理的思惟の飛躍といふ事をよく心得てゐない。それ故に、自己の採れる研究方法を推し進めて行くと遂にはそこに到る可きものであるに拘らず、そこ迄推究しないで、途中で止めて居る場合が甚だ多い。唯物史觀の如きも其の適切な實例で、若し右に云へるが如き種類の歷史家が、推理を充分推し進めて行つたならば、彼は恐らくは唯物史觀に到達す可き筈のものなのであるが、幸か不幸か否不幸にして、彼の推理の不足の爲めに、或は推理を排斥するが爲めに、唯物史觀の是認に迄進まずして、否唯物史觀を排斥しつゝ、實は唯物史觀と同じ觀方で歷史を研究して居ると云ふが如き矛盾した事をやつて居るのである。

併し乍ら歷史家の中には、唯物史觀を正面から排斥して、唯心的史觀を採らんとする者すらある。予が後に說く所に依つて明かになるであらう樣な理由に依り、唯心的な觀方は唯物的な觀方よりも、哲學的史觀として幼稚なものだと思ふけれ共、併し兎も角、前に言つたやうに此の史觀を疑ひ、又は對立的に精神的な觀方が起るといふ事は、之を疑はしめるだけの余地がまだ唯物史觀に殘つてゐて、史觀としては盡くされたものではないといふ何等かの點があるが爲に、かくの如くになるのではないかと思ふ。實際、唯物史觀を否難する觀方は、此の史觀が精神生活を無視するに非んば甚だ輕視して

居るとか、人間といふものが、よく正當に其の價値を認められてゐないとか、そんな點に於て、兎角問題を生じ易く、其邊になると此の史觀が充分人を心服せしむるだけの力を持たないのである。然るに、之を排斥せんとする論者は、從來決して致命的な攻擊を之に對して與へる事が出來なかつた。唯物とか、唯心とかと云ふが如き、一元的な觀方に對して、複合的な見地をとる者もあるが之はなほ問題を殘すものであつて、到底史觀としての精細さを缺いで居る。

然らば何故に、人々は何となく落付かぬ思ひをしつゝ、唯物史觀に代り得可き、卽ち之に一歩を進めたる史觀を立て得ないのであるか。其の理由は蓋し次の點にあると思ふ。卽ち、從來唯物史觀に對して立てられた史觀を見るに、何れも歷史現象に現はれた事實の觀察を出發點となして、或は形而上學的に之を立て、或は部分科學の見地から之が打立てられてゐるので、畢竟、唯物史觀と大同小異の思考方法を採用するに過ぎぬ。其の結果は新史觀なる者が、唯物史觀と水掛論をやるに非ずんば、唯物史觀が現代生活に卽してゐるのと其の一面に於て有する科學的觀方の特徵の存在との爲めに壓倒せられて、かへつて藪蛇に終るのを見るのである。要するに歷史現象に觀察を加へ、思索して抽象的に立てられた從來の史觀では、とても卓越したものを望み得ないことになつてゐる。其等は歷史を全體として把握したものでないから、全體的な現象考察を要件としてゐる素朴歷史家を滿足せしめないのを加へ、思索して抽象的には當然であつて、從來の如き方法を何程繰返しても、決して根本的に新た

なる觀方が立てらる可き道理はない。そんな次第で史觀の問題は、今日に於ては實の處行きつまつたものとなつて居る。

然らば此の行きつまりを打開する方法は何であるか。予は之を考へて要する處、形而上學的な觀方の徹底的排斥にあると信ずる。言ひ換へると、史觀の科學的建設を飽く迄純正なものに推し進めて行く事にあると思ふ。實に唯物史觀が現代人を吸引する力を有する根本的な理由の一つは、其の科學的立場を有する點にある。現代の資本主義經濟の機構が、生產力發展の論理に依つて科學的に說明せられ、現代社會の矛盾が之に依つて如何にも尤もらしく鮮明に暴露せられたといふ事は、此の史觀の威嚴を人々の間に華やかに誇示したものである。從つて又古來の歷史に就ても、之に依つてのみ眞に根本的に理解せらるゝとまでに信ぜられるのは、蓋し無理からぬ事である。實に此の唯物史觀の科學的方面こそは、從來の如何なる史觀にも優りて、長所と認めらる可きものである。此の點は、充分高く評價せられて然る可きことである。實に唯物史觀以前の歷史觀が、極度に形而上學的であつたといふ事は、今日彼等が根本的な不信用を招いてゐる原因となつて居る。形而上學的である以上は、史觀が單純な思辨の產物となり、全然抽象的なものとなり來る。その史觀が假令如何程眞理性を持つた樣に見えても、究極する處、科學的に覺醒したものを動かす力に於て乏しい。古來史觀を以て、何等か形而上學的な立脚地からのみ起るべきものゝ如く思はれてゐたのは、抑、甚だ迷蒙の脫し難い所なので

ある。唯物史觀が科學的な要素を多分に含んだ史觀であると云ふ事は、現代的な史觀として力を有する根本的な理由をなしてゐるのに相違ない。

然るに唯物史觀は、右の長所あるに拘らず、他方面に於て、充分現代的となりきれないものを有つて居る。といふのは、未だそれは十八世紀的な形而上學の殘滓を捨てかねたものであると言ふ事だ。今日唯物史觀は科學的な方面を益々發展せしめたが、其の起れる初めに於て、歷史現象の中から特に生產力を抽象し來り、之に歷史發展の全般的原動力と言ふ重大な任務を負はしめたる者なると共に、其の論理構成に於ては、唯心的辨證法に對し唯物的な辨證法を採用してゐると云ふ事は、今日にあつては此の史觀に於ける寧ろ迷惑なる形而上學的殘滓となつて居る。唯物史觀は科學的史觀たる趣きを多分に有するとは云へ、其れは外觀にすぎぬ。本質に於て、それにはまだ極めて舊式な形而上學的史觀なのである。その立論の核心に於て形而上學的なものを許して居るので、それだけの部分は、いつ迄たつても殘り、遂に科學的になりきる事は出來ないと言ふ悲しき運命を背負ふて居る。現代の素朴なる歷史家はもとより、文化科學の研究者が、今若し唯物史觀に從へよと言はれたとして、彼等が如何にしても疑問とせざるを得ない點の最大なる者は、何故に究極する處天降り的に經濟的觀方といふものが提供せられて、其れに從はねばならぬかと云ふ方法論的な疑惑にあるのだ。唯物史觀の論者にして見れば、此の點に就て、辨證法の哲學と科學との結合を說いて、色々言ひ分けを立てやうとするで

あらうが、畢竟徒勞に終ることに相違がない。唯物史觀の方が唯心史觀よりも史觀として後に起つただけ歷史現象に對して反省的なものであることは、之を認めざるを得ないのであるが、然も此の史觀に於て人々をして一抹の不安を感せざるを得ざらしむる所以のものは、その形而上學的方法の捨て去りがたき存在にあるのだ。實をいへば此の方法の存在の爲めに唯物史觀が甚だ鋭利な刄となつて居る事は事實であるが、同時に此の刄に依つて唯物史觀自身が傷付かざるを得ないものとなつて居る。彼は常に觀念論を攻擊するに拘らず、彼自ら觀念論を奉じて居る。凡そ史觀が眞に現代的となるが爲めには、形而上學を捨てなければならないと言ふ所以は此處に其のヒントを得べきである。

要するに、予は唯物史觀は、經濟的研究の側面に於ける其の科學的方法の點に於ては多大の長所を有するに拘らず、形而上學的基礎付けの點が致命的な欠點であると思ふのである。この欠陷は時代の進行と共に、愈々鮮かに其の姿を現はしつゝある。此の史觀に於て科學的といふのは、歷史現象の中から生產力を捉へたと言ふ歷史學的には未だ甚だ不完全な方法と、生產力を主とするその經濟學的理論の點にあるが、然るにかゝる經濟學的な理論そのものを、史觀として用ひて行く根底は如何といふに、元來其れは、右に言ふ如く歷史現象の中から特に生產力を抽象したものであり、唯物辨證法の發展によつて論理構成を進むるものであつて、唯物史觀成立の根底に遡れば、不可避的に形而上學的な考へ方が存在して居る。實を言へば唯物論も唯心論も形而上學たる點では一つであるが、唯物史觀に

於ては生産力が現象たるの故を以て唯心史觀の純に觀念的に見らるゝ者とことなり、之が實證的な經濟學に結び付いて、科學的な史觀の內容を有つに至つたのである。而も注意すべきは唯物史觀は此の寧ろ第二次的に實證的研究になつた點に於て或程度の科學的正確さを示し、之れに依つて現代人の科學的な思惟慾を滿足せしめつゝあるのだと云ふ事は、皮肉にも興味ある事ではないか。然るに飜つてその論理である唯物辨證法といふ點に到ると、唯物史觀は其始め之を形而上學ではなく哲學だとして許したのであるが、歷史を見ること余りにも單純なので、懷疑に堪へないものがある。素朴なる歷史家が此の史觀の力を感じつゝ、然も其の捕虜とならぬやうに警戒する理由は實に此處に在る。

以上論述した所に依りて知らるゝが如くに、唯物史觀と雖も形而上學的な觀方を根據として居るのであるが、而もそれが現代に於て一面甚だ信用を得て居るといふ理由は、此の史觀が科學的な史觀の如き外觀を呈して居るといふ點にあるのだ。此の事は史觀の研究に於て最も反省せらる可き所である。從來史觀といへば形而上學的な要素を當然に含んだものゝ如くに考へて來たのは、實に過つた考だと言はざるを得ない。形而上學である以上は、科學の味を知つた現代人はその史觀に對して根本的な疑を抱かざるを得なくなる。人をして其の正確さを疑はしめない史觀の根據といふものは、是非とも科學的なものでなければならぬ。從來と雖も史觀より形而上學を捨てゝ、科學的に考へんとする努力が全くないではない。例へばコムトの言つた實證主義的な歷史觀の如きはそれであつて、環境（ミリユー）を尊重し

て居るといふ事は、一の科學的な觀方だとも云ひ得るであらう。併し乍ら、此の學說の根本的な缺點は、環境といふが如きものは極めて漠然たるもので、其の內には自然現象もあれば、文化現象もありまだ〳〵科學的に其の根底を吟味せらる可きものであるといふ點にある。こゝに到れば、唯物史觀の如きは、其の出發點と推理方法は兎も角として、經濟的理解といふ確乎たるものを持つて居るので、科學的(?)にもそこに强みのある事を認めざるを得ない。

此處に至つて、史觀の優劣を批判するが爲の標準を示さねばならぬが、惟ふに歷史觀は人の思考方法の發達に伴ふて推移した者で、思考力の未だ開けざる時代には神祕の雲が人智をつゝみ、歷史を神の仕業となし、宗敎的な直觀的な觀方で歷史を見たのであるが、稍〻進むに及んで、其の時代の支配的な顯著な事象に基いて歷史を考察し、茲に形而上學的な思辨的な史觀が起つた。然るに近代以來科學の急速なる發達の爲に、人智は大に開け、出來得る限り形而上學から遠去つて、科學的な實證的な研究を尊重する事となつた。そして思考方法の此の發達史は論理的にも次第に進步の途を辿つたものなのである。從つて宗敎的史觀は勿論のこと、唯心史觀が今日では殆んど全く人氣を失ひ、唯物史觀に於ても形而上學的な部分は懷疑の的となつて、たゞ彼の科學的な部分が信用を博する最大理由となつて居るのである。それだから人智の發達の此の必然的な流向を以て考ふるに、歷史觀の今後の發展は、是非とも形而上學の古い衣を脫ぎ捨てゝ、斷然科學的に新に堅實に之れを建設するといふ立場を

採らなければならぬと思ふ。今日に於ける史觀の行きづまりの狀態は、全く史觀が形而上學の古き衣より脱け出で兼ねて居るといふ點にある。

世の歷史家には史觀の問題を甚だ不用意に考へてゐる者がないではない。歷史に於ける意識の世界はヘーゲル流の史觀でまとめ、意識成立の過程はマルクス流に成立の經濟的基礎を考へるのが、唯物史觀などより一層進んだ歷史の觀方であるかの如く思ふてゐる向もないではないやうだが、これこそこの頃の流行語の一つである雜炊的なやり方である。左樣な論理を無視した機械的な寄せ集めが苟くも史觀に於て出來ると思ふのが、抑々のあやまりである。ヘーゲルからマルクスへと進んだ史觀發達の過程といふものは、史觀が古來辿つて來た右に一言した思考方法の發達の方向に掉したものに外ならないのである。宗教的信仰より形而上學的思辨に進み、形而上學的思辨より科學的理論に進み行く歷史把握の態度が、今日唯物史觀に於て其の形而上學時代の終末に近づいてゐるのである。問題は精神的觀方とか物質的觀方とか言ふが如き、抽出して把へられた歷史事象の差異にも關係があるが、より根本的に重要なのは、形而上學と科學との史觀に於ける現はれ方が、ヘーゲルとマルクスとに於て如何に異なつてゐるかと言ふところにある。ヘーゲルとマルクスとの止揚と言ふやうなことが出來るかどうか。たとひ出來ても、それを彼等と同じく形而上學の古い方法でやらうとしたつて、其の實現は古來言ひふるした諺にある木に據つて魚を求むるよりも難いことなのである。若し精神的と物質的

との兩方面を見逃さないやうな、これ迄よりも一層高い史觀があるとするならば　それは再び形而上學へ逆轉することではなくして、折角形而上學より科學へ進みつゝある史觀發展の動向を推し進めて科學的史觀をあくまで純正なものとして、形而上學によらない新史觀を立てることに依つてのみ、其の目的が實現されうるであらう。

右の主張は勿論獨斷的に言ふべきことではなく、理論的に明かにされねばならぬことだ。其處で先づ問題は、何が科學的史觀であるかと言ふことになるのであるが、之に入る就ては、先づ以て唯物史觀の科學的方面が最も參考とせられねばならぬ。十九世紀の實證主義的史觀なる者は、科學的史觀の豫備的な前行的な者であるが、其の生物學的史觀でも、進化論的史觀でも、自然現象に於ける研究から比喩的に人類の歴史を觀てゐるので、これは實は眞に歴史を見たものではなかつた。實證哲學を書いたコムトは思考方法の發達史が、神學的考へ方の段階より形而上學的の段階に進み、近代に至つて最高の實證的の段階に進んで、これが最高の段階であると言つて居る。實を言へば、予はコムトがこんなことを言つてゐると言ふことを、前述の思考方法發展史を考へた後に見出したのであるが、第一の神學的は廣く宗教的と言ふのが一層よいと思ふし、最後の實證的と言ふのも、形而上學に對立せしむる近代的學問の性質を盡さない者で、是非共之は科學的と言ふべき所である。こんな譯で彼にあつては科學的な史觀となるには、まだ一點明かに自覺されてゐないものがある。彼自身も言へるが如く

彼の時代は形而上學的段階から實證的段階への過渡期に屬してゐるので、彼の見解は惜むらくは、充分實證的に發達した史觀にまで到達しなかつた。彼が社會心理學の開祖であつて、經濟は文化發達の規定者ではなく、心理的要素が之を規定するとしゐるのは、科學的には唯物史觀の否難をうけねばならぬし、又前に一言したやうに其の概念の甚だ漠然とした、文化現象も自然現象も混在してゐる環境といふが如き者の影響を重要視して居るのである。之等のものに比するときは、唯物史觀はたしかに、歴史成立の根原について、科學的に、卽ち經濟學的に或は社會科學的に、一層つきつめた者をとらへて、意識が規定せらるゝ所以を一層明かに把握した者である。

さて此處に參考とせらるべきは、現代の歴史家の間に廣く行はれてゐる文化史である。從來文化史と稱せられてゐる史風に於ては、理念とか精神とか言ふが如き者を、文化の統一者として眺めてゐる所に、形而上學的な歴史哲學の殘影を見る。文化史家は固より理念や精神を事實の中に求めて、忠實に科學的に歴史を研究してゐるのだが、かやうな文化史に於てなほ嫌らぬ所は、文化史では文化として成立した者に就て歴史の意味を理解することには努力するが、文化が如何にして成立するかと言ふ方面になると甚だ疎略で、よく根本的に之を明かならしむることが出來ぬと言ふ缺陷をもつてゐることである。文化の發展史ではあるが、文化の成立史として不充分だと言はざるを得ないものがある。然るに今日文化史に對して、かやうな缺陷あることに就て反省をなさしむる所以の者は、外でもない。

唯物史觀の主張する構成史的な歴史の觀方より言ふ時は、文化史は遂に文化の歴史たるにすぎぬ。歴史研究其者としてはまだ殘された者をもつてゐると言はざるを得ない。

此處に至つて、切に史學者の批判を仰ぎたき卑見がある。それは先に述べた思考方法の三段の發展に伴つて起る三段の歴史觀の展開なるものに隨ひ、予は歴史記述の形式に就ても、これ亦三段の展開のあることを思ふものである。卽ち宗教的思考法によれる直觀的な宗教的史觀始に起り、次に形而上學的思考法によれる思辨的な形而上學的史觀來り、而して科學的思考法の發達の爲に、實證的な科學的史觀が、實は管見の範圍では從來よく自覺せられてはゐなかつたが、今や其の成立の時期に入り來つたと言ふ、此の三段の史觀に對應して、歴史を直觀的に神力によつて發現した者と考へる發現史先づ起り、次には思辨的に歴史をある觀念例へば自由と言ふが如きものゝ發展であると考ふる發展史が起つて來たのであつて、最後に今日ではまだ完全に自覺されてはゐないが、歴史を其の成立の根源より眞に必然的發生の現象として考へる所の成立史といふ者が起りつゝあると見るのである。そして科學的史觀と成立史とは、實に予が此の論文の結論として主張せんとする者ある。歴史家は史觀に就ては寧ろ無意識的であるのを常とするが、思考法の流れに從うて、かやうに三つの形體の歴史記述法が次第に展開して來た。そして最後に唯物史觀をとり入れた歴史記述法は、形而上學的な發展史の段階から、科學的な成立史の段階に進み行く境目に立てる者なのである。何故にそれを言ふかに就ては、再び茲

に唯物史觀を吟味しなければならぬ。

實に唯物史觀による歴史は、因果關係の研究と言ふ點に於ては、文化史よりも史風としては一歩前進した者である。其點が一つの着眼點だと思ふ。抑々歴史が偏に右に述べた發展史である間は、其の歴史はどう見てもまだ眞に歴史學の使命に忠なるものではない。蓋し歴史學の使命の最大なるものの一つは因果關係を究明することに在るが、發展史にあつては沿革を明かにするには適當であつたが、原因を探る段になると不十分であるからである。或る文化の由來をたどりたどつて其の發生の古に歸り、又は或る文化の流動を下り下つて其の末に至ることの如きは、今日では最早時代後れとなりつゝある歴史家の試みる所となつて終つた。歴史がかくの如き沿革の研究である間は、歴史は發展史たるに止まつて「成立史」ではあり得ぬ。歴史の成立原因を考へても、まだ淺はかなるものに過ぎない。例へば朝鮮征伐は國内平定の結果だと言ふ樣に、事態の發展を以て因果の關係と誤解したりしてゐる。尤もかくの如き發展史と雖も、歴史學の原始形體である發現史より優れた者であることは言ふまでもない。予の言ふ所の發現史は宗教的史觀に應ふるものだ。其の最もナイーブな形は歴史は神意によつて發現したものと見るのであつて、舊約創世記や羅馬の建國史や我國の古事記に見るやうに、諸國の起源史はかくの如き歴史の叙述から始まつてゐて、其處に神意を讃仰する發現史がある。そして發現史の最も最後的な殘影としては、英雄的歴史の或者の如きがそれであると言はざるを得ない。神格を

付せらるゝやうな偉人の業績を中心とする政治史の中には、實に此の意味から甚だ舊式なのがある。こんなものに比べたなら、發展史は進歩した歴史の形體である。尤も之にも幼稚なものから發達したものへと段々差別はあるが、此の發展史に至つて、歴史は勃發的發現的なものではなくて、由つて來る所のあるものなることが、卽ち由來なるものが明かにせられた。そして觀念的な者が永續的であり發展的であることは先づ着目せられた所であつて、形而上學的史觀に相應する發展史にあつては、觀念的な者が發展すると言ふやうに、歴史を觀念的に理解するのが自然である。ヘーゲルの歴史哲學に於ける自由意志の發展といふが如き者が、其の最も典型的な形式であることは言ふ迄もなく、かゝる種類の、卽ち理念とか精神とかを中心として考へる歴史の最も進歩した、と言ふのは觀念的な者のとり方を實證的に行ふて、其の點では科學として完全な形體は、今日では、文化史なるものになつてゐる次第である。卽ち其處に文化史の本質があつて、文化史家は中心觀念を捉へその發展史を作り上げた時に、最も紅潮して勇ましくなるのである。

然るに茲に唯物史觀的歴史に至ると、文化史のやうな發展史では滿足してゐない。唯物史觀は歴史の原因を考へる上に於て、文化史よりも遙かに眞劍である。卽ち彼は歴史の成立の根柢を考へて必然的な者に至つたと揚言する者であつて、其の根柢を經濟的生産力に置く者である。經濟に根をもたない觀念とか意識とか理念とか言ふが如きものは、唯物史觀では一個のナンセンスである。空漠たるイ

デオロギーである。此の觀方其者の當否は兎も角として、此の必然的原因を考へたと言ふ點は、確かに歷史學の最大使命である因果關係の究明と言ふことに就て、唯物史觀が文化史的史觀よりも斷然進歩した者であると言ひうる所以である。之に比すれば文化史で原因と考へた所の者は、必然に迄考へ至らない者で相對的なものに過ぎない。文化史と雖も、歷史學であるからには、勿論原因を考へてゐたが、其の原因の考へ方が深さを缺いでゐた。實は沿革に過ぎない者を原因だと思つたりしてゐた。文化史は畢竟發展史たることを以て特色として居る。之に比すると、唯物史觀は、何が眞の原因かといふことに就て、文化史よりも一層眞劍になつて、つきつめて考へてゐるのである。

唯物史觀の價値の認むべきことは右の如くである。が然らば歷史學は唯物史觀でよいかと言へばどうして左樣ではない。之はまだ成立史として純なる者を有つに至らない者だ。漸く其の端緒である。此の史觀の由來が形而上學的であるだけ、それだけ觀念的な發展と言ふが如き者を、全く脫却し去つた者ではないのである。歷史が如何なる基礎の上に成立してゐるものであるかと言ふ點が、充分正當に見詰められてゐない。これは最も注意すべき事なのだが、この事は唯物史觀に言ふ所の歷史の構成的な觀方なるものを吟味すれば、直ちに判明することである。

唯物史觀では歷史發達の最後の原動力として生產力あることを言ふのである。げに生產する力こそは推進する力であるから、生產力を歷史成立の動力と考へたのは面白い。唯物史觀が生產力を持ち出

したと言ふことは、發展史としても此の史觀の最大の强みであるに相違ない。そして此の生產力の上に生產關係が成立する。生產と分配との關係は社會階級を規定する。各種の文化現象がかゝる社會に於て成立する。かやうにして此の史觀に基く歷史の觀方が成り立つのであつて、それは生產力を基礎とする限り、まことに間然するところなき體系を備へた理論となる。そして經濟的方面からのみ歷史を觀る以上は、生產力を重視する此の觀方は、最も有力な者となるであらうと思はれる。然るに、茲に起る所の疑問は、生產力は果して究極的な歷史推進の原動力であるかと言ふことである。そして之に就ては、斷然否と答へざるを得ない。生產力は決して究極的な者ではなくて、生產力の依つて來る所は人類の精神力を無視することの出來ぬ者である。人類と自然との關係にまで遡らざるを得ないものである。勿論唯物史觀と雖も此の最後の關係を考へないではないであらうが、生產力をこれだけは終始動かさないものとして、要するに之を基本せずんば止まざる以上は、最後的の所まで推及せざるものである。卽ちまだよく其の目的を達した者と言ふことが出來ない。生產力の據つて以て成立する根元である人類と自然との關係を、豫斷を置くことなくして研究し、其の地盤の上に歷史を考へるのでなければ、かの有名な下層建築の基礎工事が全く以て危險千萬なものだと言ふことになる。

卒直に所見を述ぶれば、唯物史觀が上層建築の文化に對して下層建築の經濟を置くと言ふことは、まだ割り切るゝことの出來うる生產力を、割り切れざる者の如く扱ふてゐる所に、根本的な過ちを犯

して居ると言ひ得る。唯物史觀は、正しく此の一事を念頭に於て、其の科學的價値を評價さるべき性質の者である。唯物史觀は法律や宗教や學藝等を上層建築にすぎぬと言ふけれども、生産力にして割り切れる者であり、更に其の基礎となる者のあることを思へば、經濟と雖も上層建築の一種ではないか。之も亦文化であり上層建築であると言はざるを得ないではないか。人或は法律や宗教などに比べると、經濟の方が下層だと言ふであらうが、右の意味に於ては經濟も亦既に上層的のものであるとすると、それと法律や宗教などとの關係が、必ず考へ直されねばならぬものとなるのである。歴史的に最も基本的な關係が、人類と自然との關係と言ふ所にあるとすると、たとひ經濟的に歴史を考へるとしても、法律なり宗教なり學問なり藝術なりに關しても亦、必ず一應はこの基本的な關係に溯つて其の成立を考へた後でなければならぬ。唯物史觀の科學性と言ふことは、此處に根本的な難點を藏してゐると謂はねばなるまい。又、唯物史觀が成立史の原理となるのに不完全な理由がこゝに存する。そして唯物史觀の此の根本的な難點と不完全とが生じた原因は何であるかと言へば、其れは此の史觀の理論となれる形而上學的な思辨に其責が在ると信ずる者である。其の始めに於て生産力を把へのであるからして、此の史觀の推究は、經濟的推進力である生産力といふ者以上に進むことが出來なかつたのである。こゝには明かに生産力の更に根源となるべき人間の精神力の甚だしき輕視があるけれども、其れは此の史觀としては償ひ難き缺陷であつて、如何ともすることが出來ない。唯物史觀の科學性と

言ふ者が、實は第二次的な存在で本質的なものではなく、從つて此の史觀による成立史は未熟な者だといふことが、こゝに至つて愈、明かになる。

意識と言ふ點を考へても同樣である。意識と生產力との關係は、實を言へば後者を以て常に前者の制約者だとは言へぬ。發達した文化に於ける意識を考へると、成程意識の大なる制約者が生產力にあるやうだが、其の生產力の出來た源には人間の文化的意識が宿つて居る。次第に此の關係を順押しに遡つて見ると、極めて本能的な原意識的な精神力が、最初の生產力の發生に與つてゐると言ふ所にまで進む。そして其の原意識なるものが既に將來諸方面に分岐し展開すべき複雜な內容を有つてゐる。生產力を故意に或程度以上のものに止めない限り、生產力が根底的だとは言へない。それにも拘らず唯物史觀が、意識に對する經濟的制約を必然的に前提的なものだと言ふのは、其の始め既に成熟した歷史生活を眺めて、生產力を根本的だと見て作られた此の史觀の形而上學的斷定の爲に妨げられて、どうしても左樣に言はざるを得ないのではないか。こゝに此の史觀の非科學的な態度があると思ふ。この點に於ても唯物史觀は決して潑溂たる生氣に滿ちたものだとは言へない。

歷史學が發展史より成立史に進むと言ふ契機は、唯物史觀に於て見られ、其點に於ては此の史觀の卓越を許さゞるを得ないのに拘らず、此の史觀では到底歷史學をして、眞に最も發達したる歷史形體であるべき成立史たらしむることが出來ないと言ふ理由が、右に述べた形而上學的殘滓の存在に於て

見られる。唯物史觀は「成立史」の史觀となるには不徹底なものである。此の不徹底さは他面に於て、彼が發展史を本領としてゐる點に於ても見らるゝ。見よ、唯物史觀では生產力の發展とか、生產關係の發展とかと言ふことを、それこそ觀念的な熱心さを以て說くではないか。生產力や生產關係は、勿論かの自由とか善とか惡とかと言ふが如き、純精神的な觀念ではない。その實體は現象であるに相違ないが、併し之を與へられたるものとして振り廻すときには、之を觀る所の態度に於て確かに觀念的だと言はざるを得ない。唯物史觀は觀念論を攻擊するけれども、彼自身觀念的な觀方から脫し切つた者ではない。然らば其の原因は何であるかと言へば、前に言つたやうに、此の史觀が形而上學を足場として居るから、觀念が實は先に立ち、現象界の理解が後になると言ふ關係から起つた當然の結果なのである。實に此點に於て、唯物史觀は科學的研究の對象である現象を內容に盛りつゝ形而上學的な外殼を以て蔽はれたと言ふか、科學的な血肉を有するが形而上學的な骨格を有すると言ふか、とも角未だ純粹に科學的なものとなり切つてゐない者であり、又純粹に科學的なものになり切ることの出來ぬ者である。此處に此の史觀の最大のなやみのあることを否定し難い。客觀的研究を口にする歷史家が唯物史觀の長所を認めつゝ、一抹の不安を禁ずる能はざる所以がこゝにある。

此のなやみから脫しこの不安をのぞくのでなければ、今日の史觀に生き行く途はない。然るに之を脫し之を除くとなると、唯物史觀は亡びざるを得ない。固より凡ての形而上學的な史觀が亡ぶべき最

後の時だ。かくて形而上學の殘物が全くすてられて、科學的に歷史の根底を把握せんとする眞の科學的史觀が、勇ましき生ぶ聲をあげて生れ出でるのである。そして歷史學も亦此の時同時に、發展史を本領とするこをやめて成立史になり切るのである。今後の歷史觀は眞の科學的史觀たるべく、今後の歷史學は眞の成立史でなけらねばならぬ。

然らば茲に提唱する所の「科學的史觀」とは如何なるものを言ふのか、又「成立史」の歷史學とは何であるか、と言ふ質問が直ちに起されるであらうが、歷史成立の原動力に關して予の有する腹案は今日發表して憚らないだけ熟したものではないから、今後充分錬つた上で發表しやう。併し此の論文をまとまつた者にする爲には他の史觀との關係に於て、右二者の本質を要約する義務があると思ふ。

予が此處に提唱する所の「科學的史觀」は、唯物史觀とか、唯心史觀とか、倫理的史觀などゝ言ふが如き種類の史觀に對立するものではなく、彼等を包括せる高次の史觀である形而上學的史觀に對立するものである。同樣に又、形而上學的史觀より古き史觀に屬する宗敎的史觀に對立するものである。科學的史觀の特色をなすべき思考方法は、宗敎的史觀の直觀的、形而上學的史觀の思辨的なるに對して、實證的考察法を採る所にある。神慮の天を仰ぎ又は觀念の淵に沈むものと異なり、現象の平地を冷靜に步まんとする者である。固より天降り的な史觀を極度に排斥する所に、如何なる舊史觀とも斷然異なるものである。唯物史觀は思辨的な推理と科學的な考察とを不可分的に結合してゐるから、如

何に努力しても遂に全く科學的となりえざる運命を有するものなることは、繰返し說くが如くである。科學的ならんとして科學的になりきれない所に、唯物史觀の煩悶があるが、科學的史觀は史觀のこの陰鬱より脫して、理論の透明なる世界に出でたものである。

更に科學的史觀の性格は冷靜で反省的な所にある。宗敎的史觀は最も熱情的であるが、全く信仰的で批判を許さゞる者であつた。次に起つた形而上學的史觀は稍々反省を加へて、其の結果、學說の群起となつたが、一度び學說が立つと、彼自身は自己陶醉的であつて、遂には尊大不遜な性格をもつに至るものすらある。文化史の如きも明かに陶醉的な史體で、浪曼的なものとなる素質を有するが、唯物史觀に至つては、此の傾向を有する上に、これは科學的基礎に足場をもつたゞけ自信あるものとなり、其の結果は尊大不遜なものとなつて居る。神祕的信仰的とすらならんとしてゐる。實に性格的に言へば、この尊大不遜の態度こそは、唯物史觀が科學的史觀となることを得ない性格であるが、これは全く形而上學の自己陶醉の程度の昂まつたものに外ならない。之に對比するときは科學的史觀は常に反省的である。冷靜に現象の研究を行ふ上に於て熱情的であるべき理由なく、觀念に捉はれて陶醉的となり實證の歩を止めるが如きことは、固より其の性格となし得ざるものである。

次に予が「成立史」と稱する歷史の形體は、歷史現象成立の因果關係を必然的因果關係に於て把握し其上に歷史が如何に成立したるかを明かならしむるものを言ふ。成立史に對應する者は、宗敎的信仰

的な發現史、及び形而上學的觀念的な發展史なること既述の如くである。發現史にあつては、歴史は成立したる者に非ずして、神慮によつて作られた者であるから、人は只其の不可思議なる發現を叙述することが出來うるのみであつた。發展史は之に對し、歴史の中に發展し行く者のあることを認めたが、發展し行く者としては、思辨的に成るべく基本的な者を捉ふることに努めたのである。支那では勸善懲惡の觀念が古來の史風の指導者となつて居る。唯物史觀では、生産力とか生産關係とか言ふが如きものが觀念化せられて、其の發展が歴史の中心となつて居る。然るに發展史の史風では、如何なる場合にも、其の出發點に於て、歴史現象を生む所のものを、人類と自然との交渉の始に遡つて研究したのではなく、成立した歴史現象に就て考へて、或は觀念的に其の背後にあるもの、例へば自由といふが如き者を掴み、或は現象中の最有力なるもの、例へば生産力といふが如き者を捉へて、此等を基本として其の發展を考へたのである。其故に原因の究明が徹底的に吟味せらるゝことを得なかつた。唯物史觀によつて、單純なる觀念論が攻擊されたことは至極當然のことであつたが、さう言ふ唯物史觀も亦畢竟、觀念の爲に捉はれて、科學的に自由に原因の原因を探究することを妨げられて居る。併し原因の究明が、客觀的に見て必然的なる者に迄掘りさげられねば、歴史現學の研究は完成した者とは言ひ得ない。唯物史觀の論者が、往々にして主觀的な觀方を擁護し、又は史觀の時代性を强調したりするのは、此の史觀の觀念的な觀方の素質が洩れ出でるのである。又歴史的に成立した現象の中か

ら、特に或者（生產力）を捉へたと言ふ其の出發點を暴露する者である。之に反して科學的な史觀となれば素撲なる歷史家の要求せる客觀的な全面的な歷史と言ふものが始めて成就するのである。歷史家は始め客觀的なものは主觀を離れて捉へがたいので、意識的又は無意識的に主觀的な部分的な史觀に支配せられてゐたが、茲に至つて史觀が主觀より出でゝ客觀に歸るのである。部分的觀方をすてゝ、全體的觀方に移るのである。予の言ふ成立史の形體は、科學的史觀と必須的に結び付いたものであつて、客觀的、必然的、及び全面的な因果關係を明かならしむるものである。そしてかくの如き歷史であるが故に、茲に始めて歷史の發展なるものも眞の意味に於て跡づけられ、發展史の目的も亦始めて茲に至つて達成せられるのである。

科學的史觀に關する右の叙述は、此の史觀の一般的性質を語るまでのものである。實に予の主張せんとする所は、史觀の成立が、始めより直觀的又は思辨的に運命づけられることなく、人類と自然との關係によつて生ずる必然的發生の現象を科學的、實證的に研究し、此の研究を基礎として歷史の成立を說くのでなければ、眞に學問的な議論とはなり得ないことを主張するにある。形而上學的史觀が歷史現象の側面から見たものを、予は反對に人類と自然との關係の根本的關係の側面より見んとするのである。其故この研究の爲には、原始民族の研究の如きも固より重要であるが、それよりも重要なのは、人類學と地理學と心理學と經濟學とである。もし哲學を參考するとせば、現象を扱ふ者でなけ

ればならぬ。そして史學に至つては勿論最も多く參考に供せらるべきものであるが、遽かに其中より原動力を見出さうとはしてはならぬ。歴史現象に對する此の取扱ひを非歴史的だ思ふ者は未だ歴史を眞に知らない者である。史觀を反省せしむる歴史研究の祕訣は、事實を全體的な關聯に於て見るところにある。予が形而上學的史觀と言へる者の如くに、部分的な現象や觀念に捉はれてゐては歴史の眞の研究は出來得ない。科學的史觀の參考となるべき歴史の研究は、部分的な歴史現象の知見ではなくて全史的なそれである。史觀に於ける歴史學的に實證的な方面は、實にこの全史的なものを捉へて、之を史觀に生かすことに外ならぬ。自然と人類との關係に於ける必然的發生の現象を、史觀の出發點とするのも亦、全くかやうな全般的な現象考察を第一に置くが爲である。

史觀に於ける右の如き考へ方は、畢竟、歴史現象の種子とも言ふべき基本的現象を、人類と自然との交渉に於ける必然的發生の現象に求める者であり、又かくの如き基本的現象の研究をなす所の科學を歴史的諸科學の基本科學と見る者である。史觀は實にかゝる意味の基本的歴史科學の中心問題なのである。廣大なる文化科學の新たなる體系が、史觀を基礎として成立しなければならぬ。

更に科學的史觀の長所は、此の史觀が歴史學の個性的理解の方法に調和することである。始め宗教的史觀にあつては、神は國ごとに又は地方ごとに定まつたので、一國又は一地方の歴史の特性に合致する樣に發現史が作られたが、形而上學的史觀となつて、一方には國民精神などを說いたものもある

が、他方では普遍的觀念と言ふ者を持出すことにより、歷史が出來うる限り普遍的に考へらるゝこととなつた。殊に普遍史こそは唯物史觀の史家が得意になつてねらふ所であり、又此故を以て社會科學に多大の影響を與へたが、これでは惜い哉、各國の特殊史といふものが抹殺せられる。唯物史觀の應用、殊に其の巧妙ならぬ應用によつて書かれた諸國史が如何に方式的であるかを見よ。唯物史觀の本質から言へば、普遍史には或程度迄は適するが、諸國史をこれのみによつて書くことが、抑々誤りなのである。其故に史觀を眞に考へるとなると、その普遍性を如何にして各國史の個性に調和せしめうるかと言ふ事を考へねばならぬのであるが、形而上學的史觀は其點に於て不完全であるのを常とする。然るに茲に科學的史觀は、歷史成立の原動力を歷史現象に於て求めずして、逆に自然と人類との關係に於ける必然的發生の現象に於て之を求めるからして、此の自然と人類とを如何に考へるかによつて、容易に右の問題を解決することが出來る。卽ち廣く自然を地球にとり、人類を人類一般にとるときには、普遍史の史觀を得べきであるが、若し自然を或る地域にとり、人類をある民族にとるときには、特定の國民の歷史に固有なる史觀を考へうる。固よりこの場合には民族の性格と能力とを考量し、其國の地勢、風土、位置、氣候、地質等を忘れない。卽ち普遍史觀に對して特殊史觀を立てうべく、又之を立てなければ止まないのである。前者は固より後者の基礎付けとなるが、前者のみで終ることはないのである。（一九三一・六・一八）